

総務省地域力創造グループ過疎対策室

〒100-8926 東京都千代田区霞が関 2-1-2
TEL 03-5253-5536 FAX 03-5253-5537
https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/2001/kaso/kasomain0.htm



一般社団法人全国過疎地域連盟

〒101-0047 東京都千代田区内神田 1-5-4
加藤ビル3階
TEL 03-5244-5827 FAX 03-5244-5828
<http://www.kaso-net.or.jp/>



過疎地域持続的発展 優良事例 表彰

令和5年度



総務省・一般社団法人全国過疎地域連盟

令和5年度 過疎地域持続的発展優良事例表彰受賞団体

総務大臣賞

全国過疎地域連盟会長賞

過去の受賞団体はこちら

https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/2001/kaso/h17hyousyouichiran.html



07P 新潟県長岡市



山古志住民会議/
ネオ山古志村
(山古志DAO)

05P 宮城県丸森町



一般社団法人筆甫地区
振興連絡協議会

09P 富山県朝日町



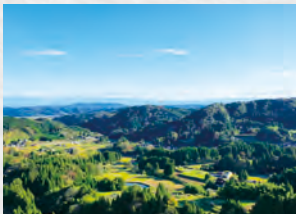
朝日町MaaS実証実験
推進協議会

11P 福島県田村市



株式会社ホップジャパン

15P 富山県氷見市



論田自治会及び
熊無自治会、
ろんくま移住
促進委員会

13P 福島県昭和村



昭和村

19P 徳島県つるぎ町



家賀再生プロジェクト

17P 兵庫県豊岡市



特定非営利活動法人
本と温泉



優良事例表彰制度の概要

今日、過疎地域では、人口減少、少子高齢化の進展など他の地域と比較して厳しい社会経済情勢が長期にわたり継続しており、地域社会を担う人材の確保、地域経済の活性化、情報化、交通機能の確保及び向上、医療提供体制の確保、教育環境の整備、集落の維持及び活性化、農地、森林等の適正な管理などが喫緊の課題となっています。

一方で、過疎地域は、食料、水及びエネルギーの安定的な供給、自然災害の発生の防止、生物の多様性の確保その他の自然環境の保全、多様な文化の継承、良好な景観の形成などの多面にわたる機能を有し、これらが発揮されることにより、国民の生活に豊かさと潤いを与え、国土の多様性を支えています。

こうした中で、過疎地域の課題の解決に資する動きを加速させ、これらの地域の自立に向けて、過疎地域における持続可能な地域社会の形成及び地域資源などを活用した地域活力の更なる向上が実現するよう、全力を挙げて取り組むことが極めて重要です。

本制度は、地域の持続的発展と風格の醸成を目指し、過疎地域において課題の解決に取り組み、創意工夫が図られている優良事例について表彰を行います。

都道府県からの推薦

表彰委員による書類審査

- ▶ 地域の持続的発展・活性化について、先駆的・モデル的取組といえるか？
- ▶ 地域資源を活用し、地域の魅力を一層高めるものであるか？
- ▶ 地域の自主的・主体的な取組であり、住民の積極的な参加・連携が図られているか？
- ▶ 相当期間活動が継続し、その効果が既に定着していると考えられるか？

表彰委員による現地調査

優良事例の決定
表彰委員会による

表彰式

日時 令和5年10月26日(木) 13時20分

場所 富山県民会館ホール
(全国過疎問題シンポジウム2023 in とやま 全体会会場)
富山県富山市新総曲輪4番18号

令和5年度表彰委員会委員(敬称略)

委員長



みやぐち としみち
宮口 侗迪
早稲田大学
名誉教授

委員



さし で かずまさ
指出 一正
「ソトコト」編集長

委員



ず し なおや
図司 直也
法政大学 現代福祉学部
福祉コミュニティ学科
教授

委員



た な か て る み
田中 輝美
島根県立大学 地域政策学部
准教授
ローカルジャーナリスト

委員



ひら お ゆ き
平尾 由希
株式会社FOODSNOW
代表取締役
フードコーディネーター

委員長講評 宮口 侗迪

本年度も表彰候補団体への各委員の視察を経て委員会で協議し、総務大臣表彰3団体、過疎地域連盟会長賞5団体を選定させていただきました。順不同で紹介させていただきますと、総務大臣表彰はまず、宮城県丸森町の**一般社団法人 筆甫地区振興連絡協議会**です。この協議会は2010年に住民全員で組織する団体に移行し、東日本大震災の苦難を乗り越えて、雑貨店と移動販売、GS、広報誌での発信、さらに太陽光発電の会社も設立し、億を超える予算規模を実現し、地区が総合的な活力を育て得ることを示しました。続いて新潟県長岡市の**山古志住民会議/ネオ山古志村(山古志DAO)**も、中越地震を克服して山古志DAOというコミュニティを結成し、電子住民票の機能を持つトークンを発行、800人弱の村にデジタル村民は海外も含めて1000人を超えます。「帰省」が移住につながり、先端的なシステムによる濃い関係人口は過疎地域のお手本です。そして富山県朝日町の**朝日町MaaS実証実験推進協議会**は、わが国で初めて事業者協力型の自家用有償運送を実現しました。バス停から遠い住民を近くの登録ドライバーが輸送する予約をタクシー会社が受け、コミュニティバスの回数券で支払う仕組みは合理的なアイデアで、その後他の自治体にも普及しています。

過疎連盟会長賞に移ります。福島県**昭和村**は、雪室でカスミソウの品質を向上させ、会津で昭和かすみ草というブランドを確立し、出荷量は全国一です。「かすみの学校」や子供たちへの「花育」などの取組は、20年間に36人の新規就農者をもたらすという素晴らしい展開です。また福島県田村市の**株式会社ホップジャパン**は、東日本大震災で遊休

施設となった場所でホップ栽培を復活、100%地元原料のクラフトビールを、多彩な役割のひと・もの・ことをつないで実現し、6次産業的に展開して地域に大きな希望を生み出しています。富山県氷見市の**論田自治会及び熊無自治会、ろんくま移住促進委員会**は、県境近くで20年にわたって2つの自治会が連携し、特産物の継承に実績を挙げ、さらに合同の移住促進委員会を立ち上げて移住促進計画を策定するなど、地区の垣根を超える活動が評価されました。兵庫県豊岡市の**特定非営利活動法人 本と温泉**は、旅館の二世の会が志賀直哉来湯100年に「文学と歴史のまち」を目指して結成し、城崎に関する文学作品を新しく出版して地元でのみ販売するユニークな挑戦で、温泉町の品格を高める貴重な文化的活動といえます。最後に徳島県つるぎ町の**家賀再生プロジェクト**は、傾斜地農業で世界農業遺産に認定されている地域の過疎・高齢化の流れに対し、地域外居住グループによる、藍栽培の復活・商品化を始めた、世界農業遺産の景観の継承にむけての貴重な活動です。

今年度も多彩な活動が表彰されました。行政と民間による特産物の育成や地域経済の活性化に加えて、デジタル村民や複数の地区の連携、外部グループの活動という新しい社会関係の育成が評価されたものからは、独立性の強いわが国の地区・集落に新しい風が吹いていることを感じます。地域交通のあり方にも新しい流れが生じ、出版という文化的な活動も生まれたこと、そして震災後の新しい展開が3団体あったことを、過疎地域のさらなる活力への息吹と受け止め、講評とします。

総務大臣賞

宮城県丸森町

一般社団法人筆甫地区振興連絡協議会

地域の課題・難題になんでも挑戦!協働の地域づくり



住民待望の「ひっばのお店」。地区住民が集まる憩いの場にもなる。

審査講評

評価のポイント

- ▶ 東日本大震災、台風災害を経験し、10年あまりの時間をかけて地域のことをみんなで考え、公民館活動を下地にしなが一生懸命に向き合っている点。
- ▶ 地域運営組織を、多様なチャレンジを通して地域の経験値を上げ、「多様な打ち手」を増やしていく場としての位置づけがなされている点。

審査委員のコメント

地域住民の協力と挑戦心が生んだ成功。

暮らしを支える「守り」の活動から、新たな生業づくりや移住者受け入れなどの「攻め」の活動まで、興味関心ある住民とともに、多様なチャレンジに取り組まれています。地域運営組織という場の活かし方とその設えのポイントを、10年あまりの協議会の歩みから学び取ってほしいです。

今後、人口減少と高齢化が一層進む中で、地域内外に担い手を広げながら、どのように地域運営のメリハリをつけていくのか、次の大きな挑戦に向き合い始めていると考えます。

取組の概要

平成22年度に丸森町から筆甫まちづくりセンターの指定管理を受けたことを契機に、**地域住民自らが住み慣れた地域で安全・安心に自分らしく暮らすことができる地域社会の構築を目指し事業を開始。**

地域の重要課題であった獣害対策としてイノシシ対策、高齢者の困りごとを解決する「お助け隊」、特産品である「へそ大根」のブランド化、買い物弱者対策として店舗の開設、ガソリンスタンドの事業承継など、**暮らしやすい地域を住民自らがつくり続け、「地域の自立」や「持続可能な社会の形成」を具現化している。**



毎週1回、高齢者宅を回る移動販売。地域住民の買い物支援と見守りを兼ねる。



地域唯一のガソリンスタンドを事業承継。暮らしのライフラインを守る。



特産品のへそ大根づくり。体験会には地域外から多くの人が参加する。



地域でできる獣害対策。地域自らイノシシを捕獲。

取組のKEY PLAYER



庄司 一郎さん

〔一般社団法人筆甫地区振興連絡協議会 代表理事〕



吉澤 武志さん

〔一般社団法人筆甫地区振興連絡協議会 事務局長〕

地域内外の連携強化によって、移住者の増加を実現したい。

筆甫地区振興連絡協議会は、地域運営組織として地域に暮らす住民一人ひとりの暮らしをより良くするために、

- ① 住民の協力を得るため、筆甫地区振興連絡協議会の存在・意義を周知し続ける。
- ② 地域課題解決への挑戦を通して、地域の経験値を上げる。
- ③ 多様な地域課題解決への挑戦を、興味関心を持つ住民と取り組む。
- ④ 専門家などの外部の力を地域に入れることや、地区内に新たな主体を創出する。

以上の4点を大切にしながら、さまざまな事業に取り組んでいます。今後も地域の暮らしを良くする事業を展開しながら、将来的に筆甫地区への移住につながるよう地域外との連携を強化していきたいと思っています。

審査による現地調査でのヒアリング対象者

庄司 一郎さん〔一般社団法人筆甫地区振興連絡協議会 代表理事〕 / 吉澤 武志さん〔一般社団法人筆甫地区振興連絡協議会 事務局長〕

宮城県丸森町

団体名 一般社団法人筆甫地区振興連絡協議会
所在地 〒981-2201 宮城県伊具郡丸森町筆甫字和田80番地2
連絡先 TEL: 0224-76-2111 FAX: 0224-73-6008
E-mail: hippo-kou@town.marumori.miyagi.jp
URL: https://www.facebook.com/marumori.hippo/



自治体・団体の詳細は
こちらからご覧いただけます。



山古志住民会議／ネオ山古志村 (山古志DAO)

NFT×限界集落 ～デジタル村民と挑戦する新たな村づくり～



ykxotkx's works「Carp and Seasons」(左)、NishikigoiNFT: Okazz's works「Colored Carp」(右上)、raf's works「Generative patterns NISHIKIGOI」(右下)

審査講評

評価のポイント

- ▶ web3、NFT、DAOを活用した地域コミュニティの維持と拡大。
- ▶ デジタル関係人口の創出と地域住民との双方間のウェルビーイングの促進。

審査委員のコメント

世界へのつながりを創出する画期的なアイデア。

人口約800人の地域から、世界へとつながるデジタルシフトの試みが素晴らしい。DAOの仕組みを用いた仲間づくり、地域づくりのとても良いお手本だと思います。また、他の地域への参考となるアイデアにも富んでいると感じました。

デジタル技術はあくまでツールであり、信頼し、幸せを補完し合う地域を超えたコミュニティづくりをしっかりと見定め、実践している点も評価に値すると思いました。

取組の概要

中越地震による被災、平成の大合併による市町村合併を契機に住民主体の地域づくりの機運は高まる一方で、少子高齢化をくいとめることができなかったが、物理的制約を解放するデジタル技術に可能性を見出し、取組を開始。

ローカルの価値を最大限に広げるのがデジタルであると考え、NFTを「デジタルアート×電子住民票」として活用し、NFTを接点とした共同体を形成し世界中から知恵や資源、独自資金を集め、地域を存続させる挑戦をしている。



デジタル村民、初帰省(2021.12)。



デジタル村民との数々のアクション。



発行から1年の節目に開催したオフ会@東京。



山古志住民・デジタル村民が参加した中越地震10.23追悼式。

取組のKEY PLAYER



竹内 春華さん
[山古志住民会議 代表]

デジタル村民とともに、新たな村づくりへ。

地域が消滅するという危機感のもと、震災以降、山古志住民とともに絶え間ない挑戦を続けてきてくれた方々のように、山古志に共感する地域外の人々＝「仲間」であることを認める仕組みを構築したいと考え、たどり着いたのが「NFT」でした。NFT発行当初、私たち山古志地域には専門的な知識はなく、手探りの挑戦でしたが、世界中の「デジタル村民」の知恵を借りながら、ともに「私たち」の新たな村づくりに挑戦しています。

審査による現地調査でのヒアリング対象者

竹内 春華さん
[山古志住民会議 代表]

@RYUさん
[山古志DAO/ネオ山古志村 山古志デジタル村民]

@fukudaoriginalさん
[山古志DAO/ネオ山古志村 山古志デジタル村民]

新潟県長岡市

団体名 山古志住民会議/ネオ山古志村(山古志DAO)
所在地 〒947-0204 新潟県長岡市山古志竹沢甲2835番地
連絡先 URL: <https://nishikigoinft.com/>



自治体・団体の詳細は
こちらからご覧いただけます。



総務大臣賞

あさ ひ まち
富山県朝日町

あさ ひ まち

朝日町MaaS実証実験推進協議会

気軽、手軽、みんな助かる!ノッカル!



「足元に気を付けて」ドライバーさんのちょっとした気遣い。

審査講評

評価のポイント

- ▶ 国内で初めて事業者協力型の自家用有償旅客運送を実現。
- ▶ コミュニティバス路線網も充実しており、空白地のタクシー、プラスノッカルの利用で、町の高齢者等のスムーズな移動に貢献。

審査委員のコメント

自治体と企業の連携が、高齢者の移動問題を解決。

地元のタクシー会社を運行協力者としたシステムを国内で初めて実現したことは、素晴らしいの一語に尽き、バス・タクシーとの使い分けが上手くいっている点も評価できます。

多くの高いハードルを超えて実現したシステムですが、その後似たようなシステムがさまざまな地域で実施されていると伺いました。

町として常にノッカルを話題に挙げ、ドライバー同士で密な連携が図れるようになれば、ますますスムーズな利用を実現できるのではないのでしょうか。



取組の概要

持続可能な地域交通の確立が求められるなか、**人も車も大切な地元の資源と捉え**、住民の自家用車移動を活用し、同じ方向へ出かけたい移動ニーズとのマッチングを図る『**共助型マイカー乗り合い公共交通サービス**』として取組を開始。

「移動」という側面から全世代がメリットを享受できる仕組みを実現しているほか、**地元交通事業者も積極的に巻き込み**、役割分担とサービスの差別化を図ることで、パイの奪い合いではなく**共創**による事業運営を実現している。



ご近所さんの安心感「今日もよろしくね」。



「いつもありがとう」「こちらこそありがとう」感謝の気持ちはお互い様。



町内全地区で導入されているノッカル。今日もどこかで運行中。



お客さんとの何気ない会話、いつの間にかドライバーさんの楽しみに。

取組のKEY PLAYER



笹原 靖直さん
[朝日町 町長]

同じ課題を抱える地域でも、広く活用されてほしい。(笹原)

真に必要なローカルサービスとして誕生したのがこの仕組み。同様の課題を抱える全国の多くの地域で、カスタマイズされながら幅広く活用されることを切に願っております。



畠山 洋平さん
[朝日町次世代パブリックマネジメントアドバイザー(朝博報堂)]

官民共創で未来の朝日町を創造していきたい。(畠山)

地域の現状や将来に合わせて地域交通を再編集・再構築しようという「官民共創」の取組です。議論を重ねて動き続けた結果、産声を上げることができました。



小谷野 黎さん
[朝日町商工観光課 主事]

“お互い様の気持ち”が、サービスの実現に導いた。(小谷野)

住民の心に根付く“お互い様の気持ち”に着目し、サービスを形にしました。地域コミュニティ内で地道な説明を繰り返すことで、徐々に浸透してきたと実感しています。

審査による現地調査でのヒアリング対象者

笹原 靖直さん
[朝日町 町長]

山崎 富士夫さん
[朝日町 副町長]

畠山 洋平さん
[朝日町次世代パブリックマネジメントアドバイザー(朝博報堂)]

大谷 和哉さん
[朝日町商工観光課 課長]

坂藤 未知祐さん
[朝日町商工観光課 主幹]

小谷野 黎さん
[朝日町商工観光課 主事]

住吉 嘉人さん
[朝日町みんなて未来!課 課長]

寺崎 壮さん
[朝日町みんなて未来!課 課長代理]

林 絵美さん
[朝日町みんなて未来!課 主査]

富山県朝日町

団体名 朝日町MaaS実証実験推進協議会

所在地 〒939-0793 富山県下新川郡朝日町道下1133

連絡先 TEL: 0765-83-1100

E-mail: syouko@int.town.asahi.toyama.jp

URL: https://www.town.asahi.toyama.jp/index.html



自治体・団体の詳細は
こちらからご覧いただけます。



株式会社ホップジャパン

過疎地域のリソースを産業循環エコシステムで活用し
中央あぶくまから発信、あぶくまブランドを造成する



写真協力:孫の手トラベルFoodCamp

ビールの原材料であるホップの栽培から手掛けており、夏にはホップの収穫体験を行っている。県内旅行会社の協力の元、地元ホップ農家の畑にて収穫体験を行い、ホップ畑に設置したダイニングで料理とクラフトビールを楽しむツアーなども開催している。

審査講評

評価のポイント

- ▶ 震災をきっかけに遊休施設となったグリーンパーク都路を復興の拠点として有効活用し、異なる役割を持った人、こと、ものを有機的につなぎ合わせて地域振興を実現。
- ▶ 震災復興のためにスピード感をもって、田村市でしかできないオリジナリティのある持続可能な産業の仕組みを確立。

審査委員のコメント

“100%地元産原料”というブランド力が強みに。

阿武隈高原の冷涼な気候、極めて情緒的なブルワリーを含む拠点の豊かな自然が、100%地元産原料で醸造されるビールの美味しさ、商品としての魅力にさらなる価値を付加していると感じました。

観光の目的として挙げられる上位項目が「食」。ブルワリーを核とした現在の敷地内でのさまざまなコンテンツの中に、食のコンテンツ(食体験、飲食店など)が加わり、より魅力的な拠点として発展することに、これからも期待したいです。



取組の概要

2000年代初頭に途絶えた福島県のホップ農業を地元農家と復活させ、ブルワリーを開業し、地域活性化の一翼を担っているほか、ビールの製造過程で排出されるホップや麦の粕を肥料として活用するなど、資源の再利用を行い、地球にやさしいまちづくりも実践している。

また、新しい価値観に基づいた企業誘致の手法「LESIP」にも取り組んでおり、実際にその理念に共感した人が移住を予定しているほか、新たな企業が地域に進出するきっかけにもなっている。



「循環」で持続可能な社会づくりを感じてもらおうテーマパークを目指し、ビールを核に1次産業から6次産業化につなげていく。



「グリーンパーク都路」内の建物を一部改修して開設したホップガーデンブルワリー。



地元住民と協働してホップの手摘み収穫に適した新たな方法を開発するなど、途絶えてしまったホップ農業を新たな形で復活させた。



田村市都路地区の魅力を感じてもらい、人と人、人と地域に「つながり」が生まれるようにという思いの元、「つながりマルシェ」を開催している。

取組のKEY PLAYER



本間 誠さん
[株式会社ホップジャパン 代表取締役]

ビール造りと地域への想いを形にしていく。

アメリカ留学でクラフトビールに感銘を受け、帰国後にホップ栽培を始めました。震災を受け、「残りの人生を地球のため、価値あるもののために使いたい」という思いから起業し、復興庁の紹介で、原発事故の被災地である都路町へ移住しました。初めはホップを栽培してくれる農家探しに苦労しましたが、今ではホップ栽培からブルワリーでのビール造り、提供までの6次産業を行い、さらには、製造過程で出るホップ粕も肥料として再利用するなど、0次産業と名付け地域で産業が循環する仕組みを理念として取り組んでいます。今後は、飲食店を誘致することで、県内外から人に来てもらえるようなテーマパークを目指していきたいと考えています。

審査による現地調査でのヒアリング対象者

本間 誠さん [株式会社ホップジャパン 代表取締役]

福島県田村市

団体名 株式会社ホップジャパン
所在地 〒963-4702 福島県田村市都路町岩井沢字北向185-6
連絡先 TEL: 0247-61-5330
E-mail: information@hopjapan.com
URL: https://hopjapan.com/



自治体・団体の詳細は
こちらからご覧いただけます。



全国過疎地域連盟会長賞

しょう わ むら
福島県昭和村

しょう わ むら
昭和村

夏秋期生産量日本一の昭和かすみ草「百年産地」を目指して



「花育」の集大成として、村内の中学生が東京都の大田市場で競り前PRを行う。

審査講評

評価のポイント

- ▶ カスミソウの「百年産地」を目指す、昭和村の生産者、JA、教育機関、自治体の協働の取組が、昭和かすみ草のブランド力を強化し、新規就農者の確保や極めて高い定着（移住定住）率につながっている点。
- ▶ カスミソウという地域資源を40年に渡って磨き上げてきた持続性、村の基幹産業としてさらなる発展に期待が持てるような、企画力と推進力。

審査委員のコメント

教育を重視した取組で、広がる地域資源の可能性。

新規就農者を増やすために最短1泊2日～最長4泊5日の日程で、先輩農家のもとで農機具の実習やマーケティングなどを学べる「かすみの学校」や、子どもたちへの「花育」など、地域資源をフル活用した取組のオリジナリティは、他の自治体の参考になり得ます。

食の世界では匂いの強いカスミソウは飲食店などのテーブル上には飾りにくい花の一つとされていますが、臭気を抑える技術をさらに進化させてPRすることで、これまでタブーだった飲食業界への販路拡大も見込めるのではないかと考えられます。



取組の概要

豪雪地帯という特徴を活かして、夏季の保冷に雪を使用する「雪室」を整備したことで、カスミソウの品質確保・向上が可能となり、夏秋期の生産量日本一、国内シェアの6割を達成している。

また、カスミソウ栽培の担い手確保・育成事業にも取り組んでおり、直近5年の就農定着率は100%であった。さらに、村内の小中学生にカスミソウ栽培体験（「花育」）を行っており、次世代のふるさとへの愛着の醸成と村の基幹産業への理解につながっている。



雪資源を活用した雪室を整備し、夏季の保冷に活用することでカスミソウの品質確保・向上を図っている。



インターンシップ事業「かすみの学校」では、村内のカスミソウ農家でUターン者を受け入れ、栽培体験を行っている。



「花育」の一環で村内の小中学生がカスミソウの収穫体験を実施。



生産者自らスーパーの店頭に立ち販促活動を行っている。

取組のKEY PLAYER



舟木 幸一さん
[昭和村 村長]

カスミソウの力が地域の未来をつなぐ。

「自然減を社会増で補う」さまざまな取組を行っています。村では過疎化・少子高齢化によるカスミソウ栽培の担い手確保が課題となっていますが、インターンシップ事業による新規就農者の受け入れを行い、高い定着率を実現しているところです。また、村内の子どもたちにも小学生の頃から栽培に関わってもらうことで、村の産業への理解や、将来に渡るふるさとへの愛着形成などに寄与するよう取り組んでいます。

審査による現地調査でのヒアリング対象者

永戸 敦さん
[昭和村産業建設課 課長]

菅家 祐博さん
[昭和村産業建設課産業係 係長]

栗村 良輔さん
[昭和村教育委員会 教育長]

土橋 康弘さん
[昭和村立昭和中学校 校長]

栗城 久登さん
[カスミソウ生産者]

福島県昭和村

団体名 …… 昭和村

所在地 …… 〒968-0103 福島県大沼郡昭和村下中津川字中島652

連絡先 …… TEL: 0241-57-2111

E-mail: sangyou@vill.showa.fukushima.jp

URL: https://www.vill.showa.fukushima.jp/



自治体・団体の詳細は
こちらからご覧いただけます。



論田自治会及び熊無自治会、 ろんくま移住促進委員会

～ねこ"ろん"で "くま"なく歩いて 住んでみて～
ろんくま移住促進計画



すり鉢型の地形に森や集落が点在した、人と自然が織りなすろんくまの景観。

審査講評

評価のポイント

- ▶ 多様な地域づくりの取組を通じて、地域の内外の風通しを良くし、関係人口の広がりが移住者受け入れに向けた前向きな機運醸成につながっている点。
- ▶ 日常の活動をベースにしながら移住促進にも取り組むことで、各々の自治会の特徴を打ち出し人材を補完し合うことができ、「ろんくま移住促進計画」として戦略を形にし、魅力の発信、受け入れ態勢を充実させつつある点。

審査委員のコメント

“地域の味”を活かしながら、伝統を次世代へと受け継ぐ。

600年の伝統がある藤箕(ふじみ)や、地域の味である草もち、伝承料理などを地元里山に根差した資源と認識し、地元でのイベント開催時や市内の直売所で販売、提供することで関心と呼び、論田・熊無地区の前向きな姿勢を常に発信しています。他方で、さまざまな場面で担い手の高齢化にも直面し、藤箕の技術を受け継ぐ人材の育成、草もち加工でも技術だけでなく経営・雇用体制を含めた事業承継、集落運営でも「集落の教科書」づくりを通じた現状の棚卸しの作業などを進め、次世代への地域継承を求める機運の高まりが見出せています。



取組の概要

地域資源を活かしながら、住民にとってさらに住み良い地域、移住者など地域外から人が訪れる地域を目指し、地元特産の草もちの事業承継、自治会の負担を減らすためのLINEでの電子回覧板の運用、地元文化財を巡るウォーキングイベントの実施、マスコットキャラクターなどの制作といったさまざまな地域を盛り上げる取組を展開している。

各取組にキーパーソンがおり、世代間でバトンが受け継がれているほか、移住者や大学など地域外からの風が流れ込み、好循環が生み出されている。



春の桜を楽しみながら地域の文化財を巡る大人気ウォーキングイベント。



ろんくまマスコットキャラクターの「くまなくまタロー」と「ろんくまちゃん」。



ろんくま移住促進委員会の様子。地元住民、行政、大学が連携し、移住促進に向けた取組を検討。



地元で採れたヨモギやもち米でつくる「草もち」は地域の宝。次の世代へ地元の味と意思をつなぐ。

取組のKEY PLAYER



内 毅さん
[ろんくま移住促進委員会 会長]



中原 修さん
[ろんくま移住促進委員会 副会長]

多角的な取組の実現は、地域の協力があってこそ。

令和元年度の富山県の「中山間地農業再生支援事業」への取組を契機に、「ろんくま」(論田・熊無地区)が連携して暮らしやすい地域づくり、地域の活性化に取り組み始めました。現在は地域の特産品である草もちや藤箕、伝承料理の継承や、花の里ウォーク開催、マスコットキャラクター、集落の教科書作成など、さまざまな取組を行っています。一方で人口が減っていく中、今後活動の中心となる世代から負担を懸念する声も出ていますが、皆で協力しながら歩んできた地域の地力と地域外からの力をお借りし、課題解決に取り組んでまいります。

審査による現地調査でのヒアリング対象者

内 毅さん [ろんくま移住促進委員会 会長] / 中原 修さん [ろんくま移住促進委員会 副会長] / 伊東 翼さん [ろんくま移住促進委員会 事務局]

富山県氷見市

団体名 論田自治会及び熊無自治会、ろんくま移住促進委員会
所在地 〒935-0258 富山県氷見市論田2057-3(論田自治会)
..... 〒935-0251 富山県氷見市熊無887-2(熊無自治会)
連絡先 TEL:090-9108-2314(ろんくま移住促進委員会事務局 伊東)
..... E-mail:ronkuma.himi@gmail.com
..... URL:https://ronkuma.com/



自治体・団体の詳細は
こちらからご覧いただけます。



特定非営利活動法人 本と温泉

地産地読



「城崎でしか買えない本」を今までに4作品制作。城崎に来た際にはぜひ手に取っていただきたい。

審査講評

評価のポイント

- ▶ 旅館の二世の会が、Uターンの方(後のNPOのアドバイザー)のアドバイスを受けながら、志賀直哉来湯100年に「文学と歴史のまち」を目指し、城崎に関する文学作品を出版し、城崎で売るNPOを結成した点。
- ▶ すでに4冊が出版され、土産物屋、旅館、外湯等50ヵ所以上で売られており、2万部を超えたものもある点。

審査委員のコメント

温泉と文学を融合させた、ユニークな発想が際立つ。

城崎では、全体を一つの旅館と考えて外湯を大切にしてきた歴史があり、二世会(若旦那衆)からNPOに組織化し、その活動として本の出版を実現してきたことは大きく評価できます。

温泉観光地の活動として、文学作品を書いてもらう発想はユニークで、かつ困難な課題であると考えます。これまでの関係者の人脈を通じての執筆実現も引き続き期待し、さらには、新しいつながりの中での作品の実現など、さらなる話題を期待しています。

取組の概要

「本と温泉」は2013年の志賀直哉来湯100年を機に次なる100年の温泉地文学を送り出すべく、城崎温泉にある旅館の若旦那衆が中心になって立ち上げたプロジェクトである。

本をきっかけに「城崎のまちを訪れてくれること」等を目的に、城崎でしか買えない本を出版している。また住民、作者等と協力しながらイベント等も開催し、観光客のみならず、住民、作者等との交流も図っており、誘客促進やまちの活性化につながっている。



旅館・酒屋・お土産屋等が取り扱い店として協力し、まち全体で販売。



地域の子どもたち向けのイベントを開催し、本の魅力を発信。



歴代の作者が一同に集まったトークイベントも開催。地域と作家のつながりをとても大切にしている。



次回作「城の崎にて」のフォトブック付き英訳版を制作中。日本文学の魅力を世界へ伝えたいと考えている。

取組のKEY PLAYER



富田 健太郎さん
[特定非営利活動法人 本と温泉 理事長]

たくさんの縁が取組を成功へと導いた。

「本と温泉」は、2013年、志賀直哉来湯100年を機に、城崎温泉における文学という側面を活かし、より多くの方々が城崎温泉を知り、その魅力を深く楽しんでいただくために発足してから、今年で10周年を迎えました。

発足当時は何をしたらいいかわからず、四苦八苦でしたが、豊岡市参与の田口幹也さんよりブックディレクターの幅允孝さんをご紹介いただいてから大きく動き出しました。その後、江口宏志さん、万城目学さん、湊かなえさん、tupera tuperaさんをはじめ、多くの方のご協力により4つの本ができるに至ったご縁に感謝しています。現在は、新しいご縁もあり、城崎と文学の魅力を世界に届けるような本を制作中です。

審査による現地調査でのヒアリング対象者

富田 健太郎さん
[特定非営利活動法人 本と温泉 理事長]

田口 幹也さん
[特定非営利活動法人 本と温泉 アドバイザー]

高宮 浩之さん
[一般社団法人城崎温泉観光協会 会長]

兵庫県豊岡市

団体名 特定非営利活動法人 本と温泉
所在地 〒669-6101 兵庫県豊岡市城崎町湯島78(城崎温泉旅館協同組合内)
連絡先 TEL: 0796-32-4141
E-mail: booksonsen@gmail.com
URL: https://books-onsen.com/



自治体・団体の詳細はこちらからご覧いただけます。



家賀再生プロジェクト

家賀と藍をこよなく愛する家賀再生プロジェクト



世界農業遺産「にし阿波の傾斜地農耕システム」から生まれた、「食べる藍」を中心に、歴史ある集落の地域資源を活かした、活性化を目指す。

審査講評

評価のポイント

- ▶ 家賀地域ならではの伝統的な農法・文化・歴史を資源として活用している点。
- ▶ 商品開発などを通じて地域内外のネットワークが形成され、輪が拡大。

審査委員のコメント

民間企業を巻き込んだ、活動の輪の広がりを評価。

2018年から活動をはじめ、この5年間で伝統農法での藍栽培を復活させたことに加え、パウダー加工した「食べる藍」を使った商品開発が地域内外の企業によってさかんに行われているという輪の広がりに驚きました。商品開発をはじめとした民間企業との連携は、一定の収益が見込めれば持続可能になりやすいため、プレイヤーとして民間企業をどう巻き込むかが重要だと考えられます。



取組の概要

徳島県西部「にし阿波地域」の中でも、最大規模の家賀集落では、年々過疎化が進み、集落存続が危機的状況だったが、平成30年に地域の伝統農耕が「にし阿波の傾斜地農耕システム」として世界農業遺産に認定されたことを契機に、地域外居住メンバー5人で「家賀再生プロジェクト」を立ち上げた。

伝統農耕を活かした「藍」栽培を復活し、食用の「藍粉」を商品化。また、集落の伝統や文化などの紹介を通じた、地域活性化や雇用創出を目的に事業に取り組んでいる。



育てた藍を使って地域内外の食品業者等と協力し、商品開発や販路開拓を行い、積極的な魅力発信につなげている。



にし阿波の傾斜地農耕システムでは欠かすことのできない、カヤを使用した農耕手法を継承し、未来に向けた持続可能な藍栽培を実現している。



農業体験の受け入れ、農福連携の取組等で多くの団体と交流を増やし、関係人口の創出に努めている。



「にし阿波地域」の農業・観光・歴史・自然の魅力を伝える観光ツアーを実施。

取組のKEY PLAYER



枋谷 京子さん
[家賀再生プロジェクト 代表者]

多様な製品に活用し、藍栽培の復活へ。

本プロジェクトは5年前の2018年から開始しました。亡き夫のお墓参りで訪ねていた家賀集落でも古くから行われている農耕が2018年3月に「世界農業遺産」に認定されたのをきっかけに、藍栽培の復活を企図して立ち上げました。取組で工夫した点としては、藍をパウダー状にした「食べる藍」という珍しい品目に着目したことです。この商品は、地場産品である藍を原料として活用することができますし、食用だけではなく化粧品にも活用できるなど、用途の幅広さが強みの一つです。今後の活動の方向性としては、集落内に宿泊施設がないため、集落へ帰省した出身者や観光客、視察者などが滞在できるような拠点となる施設を整備したいです。

審査による現地調査でのヒアリング対象者

枋谷 京子さん
[家賀再生プロジェクト 代表者]

石田 修さん
[家賀再生プロジェクト ボランティアガイド]

徳島県つるぎ町

団体名 家賀再生プロジェクト
所在地 〒779-4107 徳島県美馬郡つるぎ町貞光字家賀道上474
連絡先 TEL: 0883-53-8787
E-mail: kekasaisei.p@gmail.com
URL: https://www.facebook.com/kekasaisei.project/



自治体・団体の詳細はこちらでご覧いただけます。



長きにわたり過疎地域持続的発展優良事例表彰の表彰委員会委員を務められました宮口 侗迪委員長が今年度をもって勇退されます。国内のさまざまな過疎地域とそこで暮らす地域住民の姿を見てこられた、宮口 侗迪委員長のご感想やご意見を回想記としてご紹介いたします。

20年を振り返って

今年度をもってこの表彰委員会の委員長を引かせていただくこととなった。委員長に就任したのが平成16(2004)年度なので、長い間務めさせていただいたことにまず感謝したい。私が大学で専攻した地理学は、自然から人間社会までを対象にするほど幅が広いが、その基本は、世の中の多様性がいかにして生まれているかを問うことである。富山県の岐阜県境の山村に育ち、高度成長期に東京の大学で学ぶようになった私は、いつしか成長する都市に対して人が流出する地域の存在を強く意識するようになり、それが最初の過疎法の成立の時期に重なったこともそれに拍車をかけた。

もともと筆者には、地域の価値は人口という数で決まるものではないという認識があり、少数であっても、人は価値あるしぐみを育てることができるはずという思いがあった。過疎地域の中で特例的に素晴らしい状況をつくっている地区について論文を書き、学会でも報告したが、これが研究者としてのスタートになった。

そのことがどこかで伝わったのか、過疎問題懇談会の委員にさせていただき、数年後に座長を拝命し、さらに優良事例表彰委員会の委員長をも務めさせていただくことになった。前に述べた認識を持つ私にとって、これは人生最高の巡り合わせといってよい。過疎地域の優良事例とは、まさに人口の少ないことを言い訳にしないで素晴らしい状況をつくり出している地域である。この委員会では、各県から挙げられてきた表彰候補について議論し、各委員が手分けして現地視察を行い、その報告に基づいて賞を決定してきたが、毎年のこの視察は、私にとって掛け値なしに嬉しい旅であった。

筆者は比較的動きやすい立場だったので、毎年の視察も2か所引き受けることが結構あり、委員になってから20数年の間に40近い地域を訪れたと思う。活動の立ち上げや展開の苦労話を聞く現地でのやり取りは、小さな社会での人の付き合いが作り出す価値の可能性を、あらためて示してくれるものであった。気が付いたことにアドバイスめいた指摘をすることも多かった。

大学も定年が近づいたころ、表彰地域のその後の動向を知りたくなり、国の科研費に応募し、改めて10か所あまりにお邪魔することができた。また、最初の視察の際に現地の中心人物といい関係が構築できたいくつかの地域には、のちに学生や院生を連れて訪問したりした。というわけで、表彰地域のうち複数回訪れた地域は結構な数に上る。

その中でもお世話になったのが、平成19年度表彰の高知県津野町の「森の巣箱」という、地区で経営する宿泊施設である。森の中の小さな廃校舎がいい感じの宿になっており、名前もしゃれている。1階にコンビニと食堂があり、夜には食堂に地元の人も来て、大きな声で明るい会話が弾む。大学最後の頃は院生の運転で毎年のようにお世話になった。

小集落のあり方に一石を投じたのが、平成29年度表彰

の鹿児島県日置市高山地区である。ここでは山間に散らばる6集落が議論を重ね、自治会を統合して全員が会員となるNPOをつくり、暮らしを守っている。視察の集会の際には80代後半のおばあちゃんも公民館に駆け付け、元氣な挨拶をされた。ここへはその後、自治体の塾生を連れて視察研修にお邪魔させていただいた。

ほかに紹介したい地域は数あるが、ふだん簡単に行けない場所としては、令和2年度表彰の新潟県粟島浦村がある。佐渡のかなり北に浮かぶ人口400人に満たない小島であるが、島の小中学生数人に対して、「しおかぜ留学生」が20人いて、馬の世話などを含めいきものと接する毎日を送っている。コロナで東京の人はお断りだったが、私は富山に住んでいるのが幸いして訪ねることができた。

過疎地域は人が減ったことを嘆くのではなく、少数の人間が、大きな都市ではつくれない人と人の関係や人の技、地域の資源の新しい活かし方に、さらには力を持つ人材の参入によって価値ある少数社会の構築を目指すべきということを、私はずっと言い続けてきた。あたたかい人間関係の上に、電子機器のような先端的な道具を使いこなすことによって、少数でも活力のある、都市とは異なる価値を持つ地域社会の建設は可能はずである。そのことが日本という国にとっても素晴らしい発展であり、そしてそれを目指すことが過疎地域の使命であると強く訴えたい。



高知県津野町「森の巣箱」での筆者らと住民の談笑。



鹿児島県日置市高山地区での買い物の送迎。



新潟県粟島浦村の小中学生がつくったワカメ。



委員長

みやぐち とし みち
宮口 侗迪
早稲田大学
名誉教授

編集後記

今回受賞となった団体のうち、私は宮城県丸森町の「一般社団法人 筆甫地区振興連絡協議会」と富山県朝日町の「朝日町MaaS実証実験推進委員会」の2団体を現地で視察させていただきました。

両団体とも取組を開始する前に、地域住民の課題・ニーズをアンケート等で把握しており、地域住民の課題・ニーズに合致した取組が行なわれていました。こうした取組によって、より住みやすい、より暮らしやすい地域が実現され、地域住民のQOL向上につながっていると感じました。

過疎地域における課題は多種多様で、当然その地域ごとで異なりますが、上記2団体のような、地域住民の課題・ニーズを的確に把握し、課題解決につなげていく取組は、地域の課題を解決するための有効な手法であり、大変参考になります。

最後となりましたが、受賞した8団体の皆様に敬意を表するとともに、本表彰に応募いただいた団体の皆様にも改めて感謝申し上げます。本書を通じて、受賞した団体のアイディア等を参考にし、その地域ならではの形にアレンジするなどして、それぞれの地域を活性化させるための一助になれば幸いです。

総務省地域力創造グループ過疎対策室 総務事務官
内藤 知章(岡山県美作市派遣)

